

国体レガシーに全面協力へ。来年もダブルスゴルフチャレンジカップを開催。

今年 6 月に開催された「那須塩原市長杯ダブルスゴルフチャレンジカップ～いちご一会とちぎ国体レガシーゴルフ大会～」が来年も継続開催されることになった。

この大会は昨年開催された「いちご一会とちぎ国体」のレガシーとして新設された。那須塩原市はこの大会を通じて、市民スポーツの普及とスポーツツーリズムの推進による地域活性化に本腰を入れるねらいが込められていた。すでに、担当の市スポーツ振興課と塩原ゴルフクラブとの打合せも行われ、塩カンとしてもレガシー定着に全面協力をする。

スポーツツーリズム事業は市当局が中心になりスポーツ大会を通じて、参加者の宿泊誘致を進め、塩原温泉などの観光、牛乳、乳製品などのPR、販売などを強化。地域の観光、産業などの活性化を図るのがねらい。

6月の第一回大会の競技方法は2人1組のチーム戦で、18ホールズフォアボールストロークプレーで行われた。アマチュアなら市内外の居住を問わず、参加、男女の構成とも自由。グロス、ネットの部で、優勝、準優勝、第3位～10位、とび賞、参加賞が出た。賞品には那須和牛、旅行、宿泊券、那須ワインなど特産品が提供された。大会参加のために、塩原温泉の協力旅館に宿泊する場合は、宿泊代の割引きなどの特典もある。今年の参加費は1チーム5,000円、プレー費は1人7,000円で60チーム、120人が参加した。来年も開催は本決まりとなり、要項などについては、スポーツ振興課の調整で決定し、市ホームページ掲載の申し込み専用フォームで申し込みとなりそうだ。

スポーツツーリズム推進事業

那須塩原市長杯 ダブルスゴルフチャレンジカップ ～いちご一会とちぎ国体レガシーゴルフ大会～

・開催日
6/9 金

・会場
塩原カントリークラブ
〒329-2804 栃木県那須塩原市折戸148

・競技方法
2人1組(ダブルス)のチーム戦
18ホールズフォアボールストロークプレー

・参加申込
市HPにある申込フォームにアクセス
※先着順、定員300名(150チーム)
定員 120チーム (240人)

★宿泊申込 特別付!!
宿泊先へ申込

・参加費 1チーム 5,000円
・プレー費 1人 7,000円
・参加資格 誰でも参加自由
※市内、市外問いません。ただし、アマチュアゴルファーに限る

・表彰 グロスの部及びネットの部
賞品 那須和牛、旅行券、宿泊券、NASU WINE、その他特産品など

主催 那須塩原市、那須塩原市教育委員会、那須塩原市ゴルフ連盟
主幹 大会実行委員(那須塩原市ゴルフ連盟、那須塩原市観光局、那須塩原市農協、那須塩原市観光協会、那須塩原市観光協会、那須塩原市観光協会、那須塩原市観光協会)
後援 シブハラゴルフツアー選手会、(一社)日本ゴルフツアー機構、那須塩原市観光局、那須塩原市スポーツ協会、下野新聞社

問い合わせ先 企画振興課(市民生活課) 0287-67-6030 受付時間 9:00～17:00

【今年開催したコンペ案内】



イタッ！！お盆の大雨、キャンセル200人。

今年の夏は、気象温暖化による異常気象で、猛暑日の連続となり、コースの芝の状態の悪化が懸念された。しかし、予約が集中したお盆の8月15日には、皮肉にも今夏で最もひどい雨模様となり、キャンセルが200人にのぼる事態に。それでも、4、5組が雨のプレーを強行していた。

ただ、コース整備の面からみると、雨不足による芝の黄ばみが出る寸前だったが、文字通りの慈雨となった。夏の暑さの割にはフェアウエー、グリーンとも、芝の状態はいつになく良好で、メンバー、ビジター双方から好評だ。

6月から本格的に導入されたカートのコース乗り入れのせいで、高齢プレーヤーの姿がめっきり増えた。夏の暑さによる熱中症の心配もされたが、気分が悪くなってしばらく休憩するようなケースは数件あったが、救急車の出動を要請するようなことは1件もなかった。

10月の声を聞くようになって木々の葉も黄ばみを増し、いよいよ綾錦の季節を迎える。コースが一年間で最も美しくなるのも間もなくだ。

メンバーの加藤さんが決勝へ🚩

2023年関東女子ミッドアマチュアゴルフ選手権第2ブロック予選が8月31日、122人が参加して、南・北コースで開かれた。

塩カンからは5選手が出場、加藤仁美さんが81(38、43)の22位タイで予選を通過した。決勝は10月11、12日に杉ノ里カントリークラブ(日光市)で開かれる。



【予選会当日写真】



知事盃ゴルフ競技大会(グランドシニア)

県知事盃争奪ゴルフ競技大会のグランドシニアの部は9月14日、塩原カントリークラブで開催される。北部地区の予選を通過した40人が18ホールズストロークプレーで争われる。決勝大会は10月4日、那須伊王野カントリークラブで開催される。

塩原カントリークラブ！攻略編！！【南コース】 — 中里 鉄也プロ —

☆南コース2番 ☆



【コース解説】

左ドックのやや打ち下ろしの中距離ホール。

【中里プロからのアドバイス】

1打目はフェアウェイセンターにある1本松狙い。左より右がよい！
2打目はグリーン左側にバンカーと松があるのでグリーンセンターやや右に狙いたい。
グリーンは手前からうけて見え奥が高く見えるが手前から転がるので奥に外したくない。2打目とグリーン上は錯覚に注意したい。
グリーンは左手前から右奥に、左奥から右側に傾斜があるので読みにくい。



次回は、南コース3番を紹介します!!



続・那須の小天狗—小針春芳伝⑱

井上 安正

「同行二人」という言葉がる。空海を慕い四国八十八カ所を巡るお遍路さんが、「上人さんが一緒に歩いてくれている」と自分に言い聞かせながら救いと悟りを求めて歩き続ける。小針春芳のゴルフを極めようとする姿は、まさにゴルフという大宇宙を遊行する修行僧のようでもあり、江場友幸はその同行者のようでもあった。

エバゴルフ工房と小針の自宅は、自転車で五、六分もあれば行き来することができる。工房の主の江場は小針とちょうど三十歳の年の差があった。最初に那須ゴルフ倶楽部のプロ室で小針に接したのは、十歳の頃だから、六十年近く素顔の小針に接し、小針のゴルフ道の表裏を見続けて来た。

江場の人生もまたドラマに満ちている。ゴルフの腕前は並みのマチュアプレーヤーを超えているが、腰を痛めて今はコースに出ていない。だが、ゴルフクラブのデザイン、設計、製作、修理、調整を極め続けている。小針とは異なるジャンルだが、ゴルフという大宇宙で、その探求心は小針と重なり合う。

江場は那須街道を温泉神社へ向けて登って行くと、余りの勾配に馬も泣いたといわれる泣き虫坂の急なカーブのすぐ下の那須湯本で生まれた。父親は遠い親戚が営む旅館が所有する、山林や不動産の管理をまかされていた。今は生家はないが、那須ゴルフ倶楽部の下方に位置する家並みの中にあっただ。

家庭の事情で、小学三年生のころからは東京・目黒の母の妹の家で、その女の子三人と育つことになる。年の離れた長兄がいたが、外の世界を体験したいと家を離れ、江場が八歳になるまで兄の顔を見たこともなかった。江場は夏休みなど長い休みになると、生家に戻って父母の元で過ごした。ある日、サングラスをかけ、白いスーツ姿の若者が生家にいた江場の前に現れた。

見知らぬ青年の出現に恐ろしくなって、父に電話を入れて事情を話すと、「電話を代われ」と言う。父と青年のやり取りが終えて、受話器を戻してもらおうと、父は「その人はお前のお兄さんだ」と言われ、狐につままれたような思いだった。その前に兄と会ったのは、三歳の頃だったから、それも無理はない。長兄はその後、那須の工務店に勤めたあと建設会社を自分で始めた。

折からの別荘ブームに乗って、兄の起業は成功し、趣味としてより仕事上の付き合いでゴルフを始め、那須ゴルフ倶楽部とは別のゴルフ場の所属プロにレッスンを受けるようになった。江場は東京から那須に帰ると兄に連れられ、初めてゴルフ場に足を踏み入れた。兄はシャフトを子供用に縮めたクラブを三本ほど用意してくれ、プロとのラウンドに連れて行ってくれた。江場がボールを打つと、兄ばかりでなくプロまでも、「うまい。うまい」とはやしてくれた。当時、ゴルフボールが高価だったから、兄にとっては、ボール探しの手伝いがねらいだったらしいことを後で知った。しかし、これが結構、楽しい時間だった。

生家と那須ゴルフ倶楽部は坂道を登れば至近のところにあっただ。生家の隣近所には、倶楽部に勤めている人も多かった。那須ゴルフ倶楽部はメンバーの子弟の出入りには比較的寛大で、従業員の子供達も同じ扱いを受けた。コースの一角に、有料のパターゴルフ場があり、観光客やその子供達がよく遊んでいた。そこでも、メンバーや従業員の子弟には、無料でやらせてくれた。



小学校に入った時、那須ゴルフ倶楽部の支配人の息子と同級になったので、一緒にそこで遊んでも咎められなかった。子供の好奇心から、行動半径がクラブハウス、そこから階段を下りたキャディーマスター室、プロ室へと広がって行った。那須ゴルフ倶楽部はオープン当初から、別荘族が家族で楽しむ場として、家庭的な雰囲気の色濃く漂っていたことはすでに触れた。

子供がうろうろしていても危険なことがない限りうるさく言われることはなかった。その代わり、メンバーとして入会する際の審査は厳格で、ともすれば「閉鎖的」という評判が立つこともあった。

クラブ修理

江場が那須ゴルフ倶楽部のプロ室で、小針をじかにみたのは十歳のころだった。小針はすでに二度目の日本オープン優勝を遂げた後だったから、一般のゴルフファンや地域の人々にとってはすでに“雲上人”だった。江場をプロ室に足を踏み入れさせたのは、まさに少年のあくなき好奇心だけだったが、小針の姿はさすがにまぶしかった。だが、江場がまとわりついて、小針はしかることもなく、一時もクラブを手放さず、感覚を研ぎ澄ますようにグリップを調整していた。むしろ、キャディーマスターや他のプロから小言をくらうことが多かった。

プロ室には、樹皮がむけた太い丸太が置いてあった。「これで何をしますか」「これ。クラブを直すんだよ」。小針は思い切り堅い木を搜して切ってきて、それを横槌として使い、クラブを万力に挟んで慎重に叩いた。ロフトを変えるハンマー代わりだった。そんな道具がいっぱいあった。こども目に、小針は魔法使いのように映った。

江場は東京と那須を行ったり来たりして中学時代を終え、都内の高校へ進学した。高校で本格的にゴルフをしたかったが、当時、ゴルフ部のある高校はほとんどなかった。他のクラブには入らず、街のゴルフ練習場に通って、ゴルフに取り組み始めた。兄がメンバーになっているゴルフ場で、兄がレッスンを受けていたプロと一緒に、何度かラウンドもした。

そこでたまたま安田春雄プロに遭遇し、アドバイスを受けたこともあった。安田が「ボールは腰で打つんだ」と言っていたのを今でも思い出す。安田はそのプレースタイルを上から目線と言われることもあった。しかし、江場が受けた印象からは、言葉は荒く、ぞんざいな感じだったが、気さくな気性が誤解されていると思った。

江場は街の練習場のインストラクターに、「スイングのきれいな先生はいませんか」と聞いてみた。そして、神奈川県内のゴルフ場の専属プロだった佐々木勉プロを紹介された。小針に「打ち方を教えて下さい」と願い出る勇気はさすがに持ち合わせていなかった。小針が自分でやるクラブの調整や手直し、修理を手伝わせてもらうのが精一杯だった。

小針が試合に出ると、一週間くらいは那須ゴルフ倶楽部を留守にした。小針が倶楽部に戻ってくると、「(小針先生が)帰って来たよ。今日はいるよ」という電話が入るようになった。それほどまでに、江場のプロ室通いは、那須ゴルフ倶楽部社員の間知れ渡った。

パーシモンのドライバーをはじめ、当時のクラブのグリップは、薄い緩衝材でくるんだ上に細かい皮のテープを巻いていた。長く使うとそれがゆるんでずれて、その都度直さなければならなかった。当時はゴルフショップの数が限られており、ほとんどのプロやアマでもベテランは自前で直していた。

江場は小針のやり方をまねて、すっかりそれを習得していた。若手のプロや古参のメンバーから「これもやっておいて」と調整や修理を頼まれるほどの腕前となっていた。まさに“門前の小僧”を地



で行った。冗談半分に「先生よりうまいじゃないの」と言われることもあった。

パーシモンのヘッドは、傷がついて塗装がはげるとそこから水が入り、変形したりボールが飛ばなくなったりした。だから、幾重にも塗装を繰り返さなければならなかった。小針は新しいクラブでも、そのまま使い始めることはなかった。ボールを打ってみて打感を確かめ、自分に合うようにヤスリをかけては塗装し直してからおろした。江場の頭には、「メーカーはどんな方法でクラブを調整し、どんな手法で直しているんだろう」という探求心が芽生え始めてもいた。

(つづく)





編集後記

GOLF5CC(北海道・美唄)で開かれた今年の女子ゴルフ・ゴルフ5レディスゴルフで、岩井千怜が16番(パー4)で池ポチャを5 発続け、「14」をたたいた。ツアー優勝4回、双子プロとしても知られた若手だけに、ギャラリーも選手も驚いた。「すべからく、あるがまま、」が、ゴルフなのだ。ちなみに、記録に残る1ホールでのワーストスコアは「15」だという。

西日本にあるゴルフ場で代表を務めている友人から聞いた話。そのゴルフ場のオープンコンペで、同一人が優勝し賞品を持ち帰ることがあまりに続き、常連の参加者から疑惑の声があがった。骨が折れたがそのわけを突き止めると、ボールを打ちやすい所に動かすは、入りそうもないパットに「OK」をもらうは…。

同伴競技者は毎回、ほぼ同じ顔ぶれ。同じ会社の退職者グループで、カリスマ的だった昔の上司を優勝させるために忖度(そんたく)し、プレーもスコアも「言うがまま」。「不正を通り越して詐欺という犯罪行為です」と声をかけたら、このメンバーごとコンペに顔を出さなくなった。コンペ参加者を4人減らすより、「コンペに立つ悪評の方が、よっぽど怖い」とはその友人。忖度とは実にやっかいなものだ。

井上 安正